

保護者からみた「幼児ことばの教室」の役割と課題

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大塚, 玲, 遠藤, 千砂子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006510

保護者からみた「幼児ことばの教室」の役割と課題

Roles and Problems of Resource Rooms for Preschool Children with Speech Impairments and
Developmental Disabilities from the View of Parents

大塚 玲* 遠藤千砂子**
Akira OTSUKA and Chisako ENDO

（平成23年10月6日受理）

I. 問題と目的

「幼児ことばの教室」は、言語発達の遅れや吃音、構音に障害のある幼児を対象とした相談・支援機関である。子どもたちは幼稚園や保育園に在園しながら、週に1回程度、「幼児ことばの教室」に通って指導を受ける。

「ことばの教室」と呼ばれる小学校の言語障害特別支援学級や言語障害通級指導教室のなかには、担当教員が本務に支障のない範囲で幼児の教育相談・指導を行っているところがある（小林・久保山，2001）。このような「ことばの教室」に、児童担当とは別に幼児の担当者を置くようになり、さらに「ことばの教室」とは独立した組織として位置づけられる教室が設置されるようになった。「幼児ことばの教室」とは、そうした経緯のなかで誕生した相談・支援機関である。

静岡県においても、言語障害児の早期発見・早期療育の必要性の高まりを受け、昭和50年に静岡市立一番町小学校と静岡市立南部小学校の言語障害特殊学級「言語指導教室」に幼児を対象とした「幼児言語教室」を併設したのが、「幼児ことばの教室」の始まりである。その後、昭和51年には熱海市立第二小学校に「幼児言語治療教室」、昭和52年には浜松市高砂小学校「幼児ことばの教室」と、県内各地に「幼児ことばの教室」が開設されていった（静岡県言語・聴覚・発達障害研究会，2011）。当初は専任の指導者が配置されず、県費職員の学齢児担当者がサービスとして幼児に当たっていたが、現在静岡県におけるすべての「幼児ことばの教室」で、幼児の専任担当者が配置されている。静岡県には「幼児ことばの教室」が44教室設置され、その数は全国有数となっている（平成23年度現在）。

静岡県では「幼児ことばの教室」に対するニーズが高まり、相談や指導を受けている幼児数は徐々に増加している。平成21年度は、延べ2,114人の幼児が「幼児ことばの教室」で指導を受けたが、指導を受けることができなかった待機幼児数も231人を数えた。障害種別では、言語発達遅滞が1105人でもっとも多く、全体の約半数を占めている。次いで構音障害が803人で、両者を合わせると約9割にも及ぶ。また、言語発達遅滞のなかには自閉症やアスペルガー症候群などの広汎性発達障害の診断名がついたり、その疑いが強かったりする幼児が、3歳児で33%、4歳児で36%、5歳児で42%も存在している（大塚，2011）。近年、静岡県の「幼児こと

* 学校教育講座

** 静岡市特別支援教育センター（静岡市教育委員会）

ばの教室」においても、発達障害やその疑いのある、いわゆる「気になる子」が増加しており、「幼児ことばの教室」は構音障害や吃音、言語発達遅滞だけでなく、発達障害のある幼児の早期相談、指導の場としての役割も果たしているといえる。

「幼児ことばの教室」では、幼児への直接的な指導だけでなく、担当者が幼児の在籍している幼稚園や保育所へ園訪問をしたり、母親教室を開いたり、就学にあたっての留意点や情報を保護者に提供したりと、関係機関との連携や保護者への支援など、さまざまな活動を行っている。

このように、「幼児ことばの教室」は構音障害や言語発達遅滞だけでなく発達障害を含む特別な支援を必要とする幼児を対象とした、地域における早期療育システムの一翼を担っている。しかしそうした実態とは裏腹に、その設置についての法的な根拠がないため、地域の実情に応じて、学校の裁量や地方公共団体が独自の施策により設置・運営しているのが現状である（笹森・後藤・久保山・小林・廣瀬・澤田・藤井，2010）。そのため、相談や指導の希望が増えてもそれに見合うだけの十分な数の指導者を配置することができず、待機幼児数が増加している。また、臨時職員が多数を占めるため、職員の待遇面や研修等の課題も抱えている。

こうした問題を考えていくためには、さまざまな地域において「幼児ことばの教室」が、幼児やその保護者に対してどのような役割を果たし、成果を上げているか、地域の早期療育システムの中でどのように機能し、どのような特色をもっているのかといった実態調査を積み重ねることが不可欠である。しかし、「幼児ことばの教室」についての研究は、森山（2010）や高畑（2009）、小西（2002）、金曾・久保山（2006）による特定の市町における実践報告と国立特別支援教育総合研究所の小林・久保山が中心となって実施している一連の調査研究（久保山・小林，2000；小林・久保山，2001；小林，2008など）、そして発達障害のある幼児に対する支援教室の現状を調査した平澤・神野・大井・坂本・花熊・藤井・石塚・池谷・藤原・小枝（2010）の研究がみられる程度である。

そこで本研究では、静岡県内の「幼児ことばの教室」に通っていた新入学児童の保護者を対象に質問紙調査を実施し、保護者が「幼児ことばの教室」に対してどのような感想や要望を抱いているのか、さらに「幼児ことばの教室」に通っていた児童はどこに就学し、そこでどのような支援を受けているのか、その実態を明らかにし、保護者からみた「幼児ことばの教室」の役割と課題について考察する。

II. 方法

1. 調査対象

調査対象は2009年度に静岡県内の「幼児ことばの教室」で指導を受け、2010年度に就学した児童の保護者859人である。

2. 手続き

調査は郵送による質問紙法によった。2010年4月に各「幼児ことばの教室」から保護者宛に質問紙を郵送し、7月末日を締め切りの目安として回答と返送を依頼した。

3. 調査項目

調査項目は「幼児ことばの教室」での指導の感想や要望等に関する質問（6項目）と就学後

の状況等に関する質問（4項目）の全10項目からなる。

Ⅲ. 結果

1. 回収率

687人の保護者から回答があり、回収率は80.0%であった。

2. 「幼児ことばの教室」での指導

(1) 指導期間

指導の開始時期と終了時期、指導期間について回答を求めたところ、「幼児ことばの教室」に通い始めた時期は、3歳未満が19人（2.8%）、年少が84人（12.4%）、年中が211人（31.1%）、年長が364人（53.7%）と、年齢が上がるにつれて人数も多くなる傾向がみられた。指導終了となった時期は、卒園時が551人（87.1%）、卒園以前が82人（13.0%）であった。指導期間は1年未満が241人（46.6%）、1年以上2年未満が195人（37.7%）、2年以上3年未満が69人（13.4%）、3年以上が12人（2.3%）であった。

(2) 指導頻度

もっとも多いのは1週間に1回で434人（63.4%）、次いで2週間に1回が163人（23.8%）であった。1か月に1回が71人（10.4%）で、2・3か月に1回は11人（1.6%）と、わずかであった。

(3) 教室への紹介者・機関

「幼児ことばの教室」への紹介者・機関について、選択肢による回答を求めたところ（複数回答可）、もっとも多かったのが、幼稚園・保育園（在籍園）の471人（69.1%）であった（図1）。それに対して、保健福祉センター（保健師）は87人（12.8%）、病院は22人（3.2%）にすぎなかった。また、知人から紹介されたのは54人（7.9%）、保護者自らが「幼児ことばの教室」を探したのは36人（5.3%）であった。

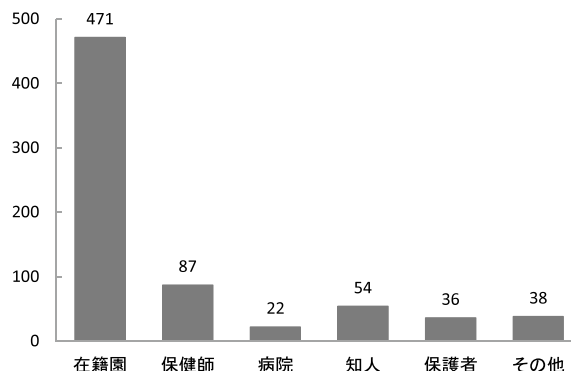


図1 教室への紹介者・経路

(4) 通級してよかったこと

子どもにとって教室に通ってよかったことについて、選択肢による回答を求めたところ（複数回答可）、もっとも多かったのは、「発音がきれいになった」337人、次いで「言葉（語い）

が増えた」265人、「話をする事を楽しんでいるようだ」226人、「会話のやりとりができるようになった」195人であり、発音や言語面での発達に関する回答が多くみられた(表1)。それに対して、「親や先生の指示が聞けるようになった」は158人、「落ち着いた、集中できるようになった」119人、「友だちと遊べるようになった」115人であった。もともとこうしたことが問題となっていなかった可能性もあるが、行動面の変化について回答した保護者の割合は、発音や言語面の発達についての回答に比べそれほど多くなかった。自由記述には、「発音できないことを気にしてしゃべらなかつたが、今では明るくなった」「吃音が少し落ち着き、とても楽しく通えた」「楽しんで教室に通えた」「自分に自信がもてた」などの記載がみられた。

保護者にとって教室に通ってよかったことについて、選択肢による回答を求めたところ(複数回答可)、回答が多かった順に、「自分の子どもの実態を理解できた」427人、「気が楽になった」279人、「子どもの成長を楽しめるようになった」249人、「子どもへの接し方が変わった」184人、「専門的な知識を得ることができた」126人、「就学先をしっかりと考えて決めることができた」60人であった(表2)。自由記述には、「他の保護者の方と知り合いになれた」「相談できる場が増え、いろいろと情報を得ることができた」などの記載がみられた。

(5) 「幼児ことばの教室」の必要性

「幼児ことばの教室」の必要性について質問したところ、「とても必要」と答えた保護者は409人(60.0%)、「必要」が245人(35.9%)で、約96%の保護者が「幼児ことばの教室」が必要であると回答した。それに対して「どちらともいえない」は28人(4.1%)で、「必要ない」と答えた保護者はいなかった。

(6) 通ううえで大変だったこと

通ううえで大変だったことについて、選択肢による回答を求めたところ(複数回答可)、もっとも多かったのは、「園を途中で抜けること」で168人、次いで「仕事を休むこと」87人、「家族の理解」40人であった。その他に、「下の子どもと一緒に連れて通級すること」「仕事の都合で祖父母に頼むこと」「通級する時に兄弟を預けなくてはいけなかったこと」「バスと徒歩で通うのが大変だった」「園の行事と重なったとき」などの回答もみられた。

表1 子どもにとって通級してよかったこと(人)

発音がきれいになった	337
言葉(語彙)が増えた	265
話をする事を楽しんでいるようだ	226
会話のやりとりができるようになった	195
親や先生の指示が聞けるようになった	158
落ち着いた、集中できるようになった	119
友だちと遊べるようになった	115
吃が減った、気にならなくなった	114
文章として話せるようになった	91

表2 保護者にとって通級してよかったこと(人)

自分の子どもの実態を理解できた	427
気が楽になった	279
子どもの成長を楽しめるようになった	249
子どもへの接し方が変わった	184
専門的な知識を得ることができた	126
就学先をしっかりと考えて決めることができた	60

3. 就学後の状況

(1) 就学先

就学先は、小学校通常級の学級が612人(91.2%)、知的障害特別支援学級が27人(4.0%)、自閉症・情緒障害特別支援学級が14人(2.1%)、特別支援学校(知的障害)が18人(2.6%)であった(図2)。

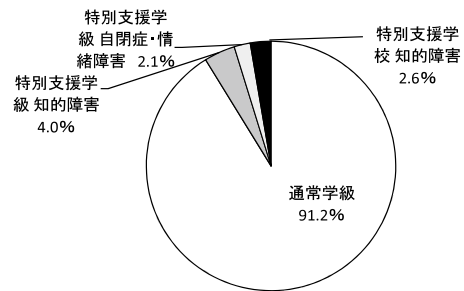


図2 就学先

小学校通常級の学級に就学した児童のうち、約半数が就学後も引き続き通級による指導を受けており、言語障害通級指導教室に通級している児童は260人(45.5%)、LD等通級指導教室に通級している児童は31人(5.4%)であった(図3)。それに対して、就学後は通級による指導を受けず、通常級の学級において少人数指導や個別指導等の支援を受けているのが25人(4.4%)で、なんと特別な支援を受けていないのは256人(44.8%)であった。

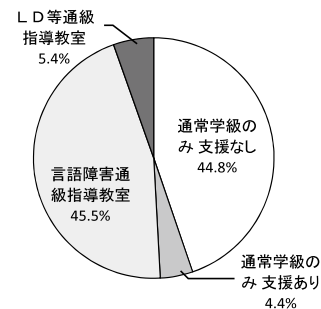


図3 通常学級での支援の有無と通級の有無

(2) 小学校で通級による指導を受けていない理由

就学後に通級による指導を受けていないと回答した保護者に、その理由について選択肢により尋ねたところ、「改善したから」が173人、「教室や枠がない」が21人、「通うのが負担」が12人であった。その他の理由として、「様子を見てから考えようと思った」「希望しており現在先生と相談中」「担任と相談して行かなくてもよいと判断したため」「放課後の通級を希望したがそれがかなわなかったため」「特別支援学級判定が出たため」「ことばの教室の存在を知らなかった」などの回答があった。この結果から、子どもの問題が改善したため、通級による指導を受けていなかったり、通常級の学級でなんと特別な支援を受けていないというケースばかりではないことが明らかになった。また、特別支援学校や小学校の特別支援学級へ入学した児童の保護者からは、特別支援学校や特別支援学級へ入学してもことばの教室へ通級したかったが無理であったという意見が寄せられた。

(3) 情報の引き継ぎ

「幼児ことばの教室」での情報が就学先へ伝わっているかどうか尋ねたところ、「伝わっている」と答えた保護者は234人(34.9%)で、「伝わっていない」と答えたのは51人(7.6%)、「わからない」と答えたのは385人(57.5%)であった(図4)。「伝わっている」と回答した割合を就学先別でみたところ、通常級の学級では32.4%、言語障害通級指導教室では38.5%、LD等通級指導教室38.7%、特別支援学級34.1%、特別支援学校16.7%であった(図5)。特別支援学校を除き、

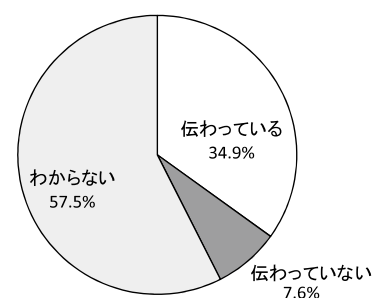


図4 就学先への情報の引き継ぎ

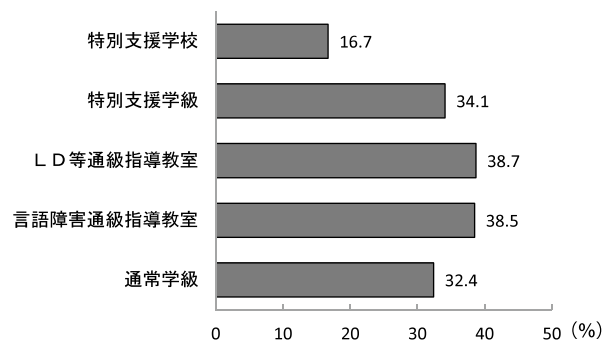


図5 就学先別の情報の引き継ぎの割合

「伝わっている」と回答した割合はいずれも3分の1程度である。「わからない」という回答が多くみられるのは、この調査が就学早々に実施されているため、まだ学級担任や通級指導教室の担当教員と保護者が面談等をしていない可能性も推測される。

(4) 現在困っていること

現在困っていることの有無を尋ねたところ、「ない」と答えた保護者は464人(72.6%)で、「ある」は175人(27.4%)であった。

「ある」と答えた保護者の自由記述を分析したところ、コミュニケーションに関すること、発音や言語に関すること、行動に関すること、学校生活に関すること、学習に関すること、家庭でのこと、通級するうえでの問題の7つのカテゴリーに分類することができた。たとえば、コミュニケーションに関することでは、「思ったことを何でも口にしてしまう」「他人の話をちゃんと聞けない」、発音や言語に関することでは「まだ発音が気になる」「知らないことばが多すぎる」、行動に関することでは「落ち着きがない」「嫌なことはやらない」、学校生活に関することでは「学校での集団行動についていけない」「自分から友だちの中に入れない」、学習に関することでは「平仮名の読み書きができない」「読解力や理解力が弱い」、家庭でのことでは「家に帰ると赤ちゃんことばになってしまい、妹もまねをする」、通級するうえでの問題では「学校を早退すること」「教室と学校の時間が合わない」などの記載がみられた。

4. 「幼児ことばの教室」への意見・要望

肯定的な感想として多かったのは、担当者への感謝の言葉であった。「子育ての基本を教えてもらえてよかった」「先生の対応が勉強になった」「悩みを聞いてもらえてよかった」などの感想が寄せられた。もう1つは、他の保護者と話をするのができてよかったというものである。先輩お母さんから助言してもらったり、自分と同じ悩みを抱えている保護者と話をしたりすることで気持ちが楽になったなどの感想が多くみられた。

「幼児ことばの教室」への要望は大きく3つに分類することができた。1つは情報の引き継ぎについてである。「幼児ことばの教室」での指導等の情報が就学先へ十分に伝わっていないことへの不安である。担任に子どもの状態を説明するのは専門的な知識がない保護者にとって困難を伴うため、「幼児ことばの教室」から直接就学先へ伝えてほしい、あるいは在籍園と連携をとってもらい、園から就学先に伝えてほしいというものである。次に広報・啓発に関する要望である。悩んでいる保護者にできるだけ早く教室の存在を知ってもらえるようにしてもら

いたいという意見がみられた。また、ことばの教室に偏見をもっている人もいるため、もっと広くその存在を知ってもらいたいという意見もあった。3つ目は、指導の充実に関するものであり、とくに指導時間、指導人数に関する要望が多かった。幼稚園を途中で抜けたり、休まないで通えるようにしてほしい、土日に通えるようにしてほしいという要望がみられた。また教室を増やしてほしい、担当者の人数を増やしてほしいという意見も多くみられた。

IV. 考察

本研究の結果から、静岡県「幼児ことばの教室」で指導を受けた児童の約9割は小学校の通常の学級に就学しており、そのうち約半数は就学後も通級による指導を受けていることが明らかにされた。しかし、「幼児ことばの教室」での情報が就学先に伝わっていると保護者が認識しているのは通級による指導を受けている児童でさえ4割に満たず、情報の引き継ぎ実施上の課題が明らかになった。また、ほとんどの保護者は「幼児ことばの教室」の指導を肯定的に評価していたが、その一方で、「幼児ことばの教室」の広報や指導の充実に関する要望があることも明らかになった。

そこで以下では、これらの結果を踏まえ、「幼児ことばの教室」が幼児やその保護者に対してどのような役割を果たしているかを考察する。その上で、保護者からみた「幼児ことばの教室」の課題について考察する。

1. 幼児や保護者に果たす役割

療育機関が果たすべき役割は、子どもへの療育指導と保護者支援である（平野，2008）。早期の相談・支援機関として「幼児ことばの教室」が果たすべき役割も同様であろう。

指導を受けていた約9割が小学校の通常の学級に就学し、さらにそのうちの約半数近くが特別な支援なしで過ごしている現状と、7割を超える保護者が現在困っていることがないという回答の結果から、「幼児ことばの教室」は指導面で一定の成果を上げているといえる。保護者の半数近くが「発音がきれいになった」と評価していることから、指導の効果が顕著なのは構音障害であると考えられる。2006年に実施された国立特別支援教育総合研究所による全国難聴・言語障害学級及び通級指導教室実態調査においても、小学校低学年と小学校高学年を比較すると、構音障害が約4分の1に減少しており、それは小学校低学年における構音指導の効果が反映された結果であると推定されている（小林，2008）。それに対して、吃音、言語発達遅滞は高学年になってもほぼ同数であり、これらの障害種については、指導が長期間にわたることを指摘している。本研究の結果も、この調査と同様のことが推測される。就学後に支援がなくなってきた児童の大部分は構音障害の子どもたちであり、それに対して就学後も通級指導教室に通うことになった児童の多くは、吃音やLDを含む言語発達遅滞、さらにはADHDや高機能自閉症、アスペルガー症候群などの発達障害であろう。しかしながら、発達障害の子どもたちは「幼児ことばの教室」での指導・支援では効果がみられないということではない。発達障害のある年長幼児23名を対象として支援効果を検討した平澤・小枝・坂本（2009）の研究からは、半年間の通級によって幼児の望ましい変容が得られ、保護者や園担任の満足度も高いことが報告されている。すなわち、こうした障害では「幼児ことばの教室」の指導・支援によって問題が解消するというよりも、早期からのライフステージに応じた生涯にわたる支援が必要であり、「幼児ことばの教室」はその一端を担っていると考えべきであろう。

障害のある子どもの早期指導・支援において、子どもへの支援とともに重要なのが保護者への支援である。本研究の結果から、「幼児ことばの教室」の指導・支援は保護者にとっても良好な効果をもたらしていることが示唆された。保護者からは、子どもの理解と障害認識が高まったこと、専門的な知識や情報を得たこと、保護者自身が子どもの指導や接し方について学ぶ機会を得たこと、子どもの障害や子育てについて気軽に相談できる場ができたこと、そして保護者同士の交流の場ができたことについて、肯定的な評価が示された。「幼児ことばの教室」に通うことで、保護者自身が精神的な安定を得たり、リラックスできるようになっていった様子がうかがえる。言語発達の遅れや吃音、構音の障害などによって、子どもたちだけでなく、保護者自身もストレスや不安でいららし、親子で悪循環に陥り、二次障害を招くといったことも少なくない。そのような悪循環を防ぐ意味でも、保護者支援は重要であり、保護者の思いや願いに寄り添い、安心して子育てができるように支援する上で「幼児ことばの教室」の役割は大きいといえる。

2. 保護者からみた早期相談・支援機関としての課題

保護者から「幼児ことばの教室」への要望の1つは、悩んでいる保護者にできるだけ早く教室の存在を知ってもらえるようにしてもらいたいというものであった。地域の早期療育システムの一部として「幼児ことばの教室」が位置づけられている地域の多くは、総合療育センターが設置されて、保護者は迷わずそこに相談すればよいといったような地域ではない。中核となる総合療育センターが設置されていない地域では、母子保健や福祉部局と療育機関や医療機関などの関連機関に緊密な連携がとれていないと、保護者は相談機関や療育機関にスムーズにたどり着けなかったりすることになる。「ことばの教室」の保護者を対象とした久保山・小林(2004)のアンケート調査からも、「ことばの教室に通い始めるまで出口のないトンネルにいるようだった」「ことばの教室があることを教えてほしかった」など、保護者はわが子の状態に不安を感じながら、あるいは健診時に何らかの問題を指摘されながら、幼児期に適切な支援を受けることができなかつたり、ことばの教室の存在自体を知らされていなかったりしたケースが明らかにされている。

このような問題を解決するためには母子保健や福祉部局と「幼児ことばの教室」の密接な連携が不可欠となる。たとえば、静岡県内の「幼児ことばの教室」の中には、担当者が地域の乳幼児健診に参加にしたり、保健センター等で実施されている乳幼児健診後のフォローグループに参加したりしている例がある。こうした活動の中で、保護者に「幼児ことばの教室」について紹介したり、「幼児ことばの教室」の利用を勧めたりすることができるという。

保護者からの要望の2つ目は、就学先への情報の引き継ぎについてである。本研究の結果では、「幼児ことばの教室」の情報が就学先へ「伝わっている」と答えた保護者は3割強で、「わからない」と答えた保護者が6割近くにも及んだ。小学校に就学した児童の4割程度は構音等の問題が解消し、なんら特別な支援を必要としていないため、情報の引き継ぎも必要ないと考えられる。問題は、就学後も通級による指導を受けている子どもたち、あるいは特別支援学級や特別支援学校に入学した子どもたちである。このような子どもたちでさえも情報が伝わっているかどうか保護者が知らないケースが少なくないということである。個人情報保護の観点から、保護者の要請がなければ就学先に情報を伝えないとする市町の方針を保護者が十分知らされていなかったり、理解していなかったりすることがその一因として考えられる。こうしたことに

対して、静岡市では平成23年度の年長児から「幼児ことばの教室」終了時に、それまでの指導等の情報を「すくすくファイル」（相談支援ファイル）に綴じ、すべての保護者に渡すことを計画している。今後も支援が必要だと考える保護者は、「すくすくファイル」を通して、就学先へ情報を伝えることができるようになるのである。現在、相談支援ファイルは静岡県下でその活用の試行が始まっている。今後は相談支援ファイルを利用して保護者自身が情報を就学先に伝えるという方法が県下で広がっていくことが期待される。

保護者からの要望の3つ目は、指導の充実、利便性に関するものである。幼稚園や保育園における「気になる子」への関心の高まりと相まって、「幼児ことばの教室」へのニーズは今後ますます高まることが予想される。現在、希望しても場合によってはすぐに指導を受けられない状況があり、保護者からすると教室を増やしてほしい、担当者の人数を増やしてほしいという要望はごく当然のことといえるかもしれない。両親が共に働いている家庭の増加や核家族化などにより、土日に通えるようにしてほしいというのも、切実な要望といえるであろう。静岡県の「幼児ことばの教室」の大部分は小学校に設置されているため、利便性や選択肢を増やすという観点から、福祉センターや保育所への設置を検討することも必要であろう。しかし、「幼児ことばの教室」の設置には法的な根拠がないだけに、そうした具体的な方策を検討する前に、発達障害を含め幅広い幼児を対象とした支援・指導の機関として「幼児ことばの教室」を地域の早期療育システムの中でどのように機能させていくべきか、地域におけるさまざまな社会資源のなかでの役割分担とその位置づけを明確にすることから議論を始める必要性があらう。

謝辞

本研究にご協力いただいた静岡県内の「幼児ことばの教室」の担当者の皆様、保護者の皆様に感謝いたします。また、調査実施にあたり静岡県言語・聴覚・発達障害教育研究会にご協力いただきました。心より感謝いたします。

文献

- 平野亜紀, 2008: 障害児を支援する社会資源. 総合リハビリテーション, 36, 868-872
- 平澤紀子・小枝達也・坂本 裕, 2009: Strengths and Difficulties Questionnaire からみた幼稚園等における発達障害支援教室の効果. 小児の精神と神経, 49, 231-238
- 平澤紀子・神野幸雄・大井修三・坂本 裕・花熊 暁・藤井茂樹・石塚謙二・池谷尚剛・藤原義博・小枝達也, 2010: 幼稚園等における発達障害のある幼児に対する支援教室に関する研究—全国市区町村教育委員会への質問紙調査の検討から—. 発達障害研究, 32, 278-284
- 金曾奈穂美・久保山茂樹, 2006: 乳幼児期からの一貫した相談支援体制作りに対する「ことばの教室」の役割—地域支援と校内支援をつなぐ「ことばの教室」担当者の実践から—. 国立特殊教育総合研究所教育相談年報, 27, 1-7
- 小林倫代, 2008: 全国難聴・言語障害学級及び通級指導教室実態調査. 国立特別支援教育総合研究所「難聴・言語障害児を地域で一貫して支援するための体制に関する実際研究」研究成果報告書, 5-23
- 小林倫代・久保山茂樹, 2001: 地域における早期からの教育相談の場としての「ことばの教室」の役割. 国立特殊教育総合研究所研究紀要, 28, 11-21

- 小西喜朗, 2002: 軽度発達障害児の通級学級における実践—通級指導の役割について—. 障害者問題研究, 30, 153-158
- 久保山茂樹・小林倫代, 2000: 障害児の早期からの教育相談における保護者対応. 国立特殊教育総合研究所研究紀要, 27, 23-33
- 森山貴司, 2010: 幼児ことばの教室と通級指導教室の取組—さまざまな連携と支援—. 特別支援教育, 40, 32-35
- 大塚 玲, 2011: 「幼児ことばの教室」における支援と課題. LD研究, 20, 27-29
- 笹森洋樹・後藤鐵夫・久保山茂樹・小林倫代・廣瀬由美子・澤田真弓・藤井茂樹, 2010: 発達障害のある子どもへの早期発見・早期支援の現状と課題. 国立特別支援教育総合研究所研究紀要, 37, 3-15
- 静岡県言語・聴覚・発達障害研究会, 2011: レッツビギン 新任者研修資料 (改訂版). 静岡県言語・聴覚・発達障害研究会
- 高畑芳美, 2009: 幼稚園における特別支援教育コーディネーターの取組み—神戸市きこえとことばの教室の果たす役割—. 特別支援教育コーディネーター研究, 5, 55-60
- 上村逸子・森山貴司, 2008: ことばの教室における保護者支援—生駒市ことばの教室保護者会の取組みを通して—. 大阪教育大学障害児教育研究紀要, 31, 35-42